

1 派遣期日 令和5年8月3日（木）～8月4日（金）

2 派遣先 東京都台東区立根岸小学校
所在地 東京都台東区根岸3-9-8

3 研修内容

(1) 実践報告1 「自己をみつめ 他者と認め合う 小東っ子の育成」
～対話を中心とした道徳科の授業を通して～

愛知県豊川市立小坂井東小学校 吉田 安紀子 先生・度津 直美 先生

① 授業の基本スタイル「小東スタイル」の確立

- ・ ユニバーサルデザインを意識した授業
- ・ 授業の流れ「導入」「展開」「終末」の明確化
- ・ 板書の構造化（チョークの色で「導入」「展開」「終末」を使い分ける。）
- ・ 考えを広げ深める対話（ノートに自分の考えを書いてから対話する。）
- ・ 道徳ノートの「ふりかえり」（対話とふりかえりの時間を十分確保することができるよう、「中心発問に対する考え」「ふりかえり」のみをノートに書かせる。）

② 職員間での学び合い

- ・ 板書授業案による立案（板書計画を軸にした形式で指導案を立てる。）
- ・ “勝手に公開中”の取組（「勝手に公開中」という期間を設定し、ブロックを超えて自由に授業を見合う。）

③ 研究の成果と課題

- ・ 授業の流れと板書の構造化が共通していることにより、各学習活動への取り掛かりがスムーズになって、話し合いの時間とふりかえりの時間を確保しやすくなった。
- ・ 「小東スタイル」を確立することによって、進級をして担任やクラスが替わっても、子どもたちが安心して授業に参加する様子がうかがわれる。
- ・ ノートを見ずに対話する場面では、その場で考えたことや相手への反応が自然に出るようになり、時間いっぱいやりとりを続けられるようになった。
- ・ 学級全体での話し合いによって考えを深めさせることはまだ十分ではない。「この1時間に子どもたちに一番考えさせたいこと」を明確にして授業計画を立て、ここを特に掘り下げたい、このような発言が出たときに立ち止まらせたいといった意図をもって展開をイメージすることが課題である。

(2) 実践報告2 「他者対話と自己内対話で自己の生き方を考える」

岡山大学教育学部附属小学校 大西 里沙 先生

① 他者対話・自己内対話を生む手立て

ア ○○度の活用

授業の導入で、内容項目の概要を提示し、それに対して「納得できているか（納得度）」と「実践できているか（できている度）」を◎○△の3段階で自己評価し、自分の考えや行動を見つめやすくする。

イ オリジナルめあて

導入時の自己評価をもとに、児童が自分の考えたいことをそれぞれめあてにする。そして、授業終末で自分がこれから大切にしたいことをまとめる際、めあてを見返して、それに対する自分なりの答えを見つけやすくなる。

ウ 教材との出会わせ方

教材を読み聞かせる前に、「～について考えながらお話を聞こう」と声をかける。例えば、「登場人物の『わたし』のできている度は◎○△のどれだと思うか考えながら聞こう」と声をかけることで、教材の登場人物という他者を、自分と重ねたり比べたりしやすくなる。

エ 役割演技による他者対話

役割演技により、自分が登場人物になりきって他者対話することで、自分事として実感したり、自分のことを振り返ったりすることができる。

オ 対話のイメージマップ化

学級全体で話し合う際には、板書にはイメージマップを用いることで、自分の考えと友達の考えを比べながら聞くことができる。そのため、自分の考えを広げたり深めたりすることに効果的である。

② 研究の成果と課題

- ・ 導入での自己評価を関係づけながら自分の考えの変化を自覚したり、役割演技で考えたことに実感を伴った理解をしたりすることができていた。
- ・ 自己対話の深まりを生む手立てとそれを見取るための手立てが不十分であった。
- ・ 他者対話においては、学級の風土が影響しかねないので、普段から児童1人1人が安心して自分の考えや経験が話し合える雰囲気作りが大切である。

(3) 講演「道徳授業マネジメント」ー自己の生き方についての考えを深める授業構想ー

帝京大学 教育学部 初等教育学科 教授 赤堀 博行 先生

① 明確な指導観に基づく授業の創造

- ・ ねらいとする道徳的価値（内容項目）について、学習指導要領に基づき、明確な考えをもつ。【価値観】
- ・ 授業者の明確な価値観に基づくこれまでの指導と子供の学び、よさや課題を明確にし、本時の方向性を示す。【児童観】
- ・ 授業者の明確な価値観、本時の方向性を基に、教材の活用の仕方を明らかにする。【教材観】

② 道徳科の評価の基本的な考え方

学習指導過程における指導と評価を一体的に捉えることが重要である。また、学習指導過程の評価には、具体的な観点が必要となる。確かな指導観を基に、明確な意図をもって指導や指導方法の計画を立て、学習指導の過程で期待する児童の学習を具体的な姿で表したものが観点である。

③ 道徳科の授業改善（主体的・対話的で深い学び）

「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」が実現できているかという視点から授業を見直すことが重要である。道徳的価値を自分自身を視点として捉え、自分事として多面的・多角的に考えることができるような授業改善が求められている。

4 感想

(1) 実践報告1について

授業の基本スタイルが学校で確立していると、職員誰にとってもわかりやすく、また、児童も学年がかわっても安心して授業に取り組むことができると思った。一方、基本スタイルにこだわりすぎてしまうのもよくないのではないかと考える。基本的なスタイルをベースにしつつ、教材や児童の実態、本時のめあてに合わせて、授業の基本スタイルを変えてもいいのではないかと考えた。

(2) 実践報告2について

他者対話・自己内対話を生むための手立てがたくさん考えられていた。これらの手立てをどの教材で使うのが有効か、また授業のねらいに合うのはどの手立てかを見極める必要があると思った。児童がこの時間の対話を通して、道徳的価値について、さらには自己の生き方について考えを深められるような授業を展開したいと考えた。

(3) 講話について

授業者が明確な指導観に基づいて授業をつくることの大切さを改めて考えさせられた。道徳の授業を考える際には、価値観、児童観、教材観を明確にした上で、自分との関わりで考えられる授業を構想したいと思った。また、道徳教育は、各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすものであり、教科の学習と社会をつなぐものである。主体的・対話的で深い学びとなるような道徳科の授業改善を日々、考えていきたい。